

虚ろな時代を生きる私たち



写真は10月30日7時、自宅ベランダから撮った生駒山近辺。厚い雲のすき間から、朝の光が降り注いでいる。なんだか今年を象徴するような光景だ。

今年を振り返るうえで、『AERA』2018. 12. 31/2019. 1. 7、姜尚中「eyes」を紹介する。タイトルは標題に続いて、「19年は災い転じて福となるか」。

2018年の世相を表す漢字に選ばれたのは、「災」でした。これには驚いた方も多かったのではないかと思います。

平成最初の1989年、そこにみなぎっていたのは新時代への希望と高揚感でした。あれから30年を経て、平成最後の年末に「災」という漢字を選ぶような時代になるとは、誰が想像したでしょう。

「災」という漢字の選定の理由としてあがったのが、大地震や豪雨、記録的な猛暑などの自然「災」害、さらにはスポーツ界のハラスメント問題などの人「災」です。

確かに18年は、甚大な災害がありました。その結果、今年の漢字として「災」が選ばれたわけですが、それに至る人々の心情を鑑みると、その根底にはびこっているのは「虚ろ=虚」な気持ちだったのではないかと思います。

モリカケだけにとどまらず、さまざまな問題が発覚した政治、大手企業の不正、人の命にかかわる免震不正、医大の不正入試にゴーン問題…。日々報道されるニュースを見ていると、実が伴わないものばかりで、組織のトップに立つ人の発言でさえも虚ろに聞こえてきます。民主主義のあらゆるものが「一つの虚構」ではないかという気分させられました。

自分たちが信頼しているものが、実は虚ろであることが分かってきて、そういう意味では落胆と失望が多かった1年だったと思います。

「実」と「虚」というのは、言ってみれば「明」と「暗」です。これだけ「虚」がたむろした平成最後の年を思えば、人々が「実」を求めるのも納得できます。そんな中で最後のよりどころは皇室、と思う人が増えているのではないのでしょうか。そこだけは「虚」がないはずだと信じたいのかもしれませんが。

平成という元号の由来は、「天地、内外ともに平和が達成される」ということでした。次の元号が何になるのかはまだわかりませんが、「実」を表す言葉が出てくるかもしれません。時代は「虚」から「実」へ。「災」い転じて福となるように。だんだんとそういう方向に向いていく、そんな「実」のある時代になってほしいと願っています。

(2018年12月30日)